

欧陽鉅源とその作品

麦生登美江

はじめに

『負曝閒談』の作者として知られる遽園——姓は欧陽，名は淫，字は鉅源（源は元とも書く），茂苑惜秋生の筆名で有名（茂苑とは蘇城の長洲の別名）——は，李伯元の有力な片腕としてともに《游戯報》¹⁾《世界繁華報》²⁾『繡像小説』³⁾などの編集に当り，若干の作品も発表しているが，従来，李伯元の盛名の陰に隠れてやや影が薄かった。

しかし，拙稿「李伯元と欧陽鉅源」（『中国文芸研究会会報』第33号）で触れたように，鉅源の友人包天笑⁴⁾は，

ある人がかつて私に言った：『官場現形記』（以下，『現形記』と略記……筆者註）は，最初は李伯元自身が書いたのだが，後の方は伯元が材料を集め欧陽に渡して書かせたのだ。伯元は交際に忙しかったし，さらにまた力が省けることを喜んだのだ。⁵⁾

と述べ，さらに鉅源自身のことばも引用している。

欧陽鉅源の言う所によれば，伯元の多くの小説はみな伯元の名を使ってはいるものの，鉅源が代作したものである。しかし『現形記』にも鉅源の

1) 1897年5月下旬創刊。終刊期不詳。

2) 1901年創刊。

3) 1903年創刊。半月刊。1906年，李伯元の逝去により休刊。商務印書館発行。

4) 包公毅。1876—1973。江蘇吳県の人。朗生・天笑・天笑生・笑・釧影・余翁などの名前を使っている。清末から上海で報刊を編集し，小説を書いていた。

5) 釧影“補述茂苑惜秋生事”。原載は香港《大公報》1962年8月1日。今，魏紹昌編『李伯元研究資料』上海古籍出版社 1980年12月第1版496頁より引用。（以下『資料』と略記）

筆が入っているかどうかは訊ねたことがない。……『文明小史』等は私もかつて原稿を見たことがあるが、確かに鉅源の筆が入っていた。⁶⁾

ここで指摘されているように、李伯元名で発表された諸作品の中に本当に鉅源の筆が入っているかどうか、今ここで結論を出すだけの検討を私はまだ成し得ていないが、今後その問題を検討する上でも、また鉅源が清末文芸界に果たした役割⁷⁾から見ても鉅源に関する専論があってもいいと思ひ、本稿ではまず鉅源を取り上げることにした。

歐陽鉅源の経歴について

鉅源の経歴については李伯元や呉趼人ら以上に不明の部分が多いが、幸い包天笑がある程度まとまった記述を残しているので関連部分だけ紹介しよう。

鉅元は蘇州に住んではいたが蘇州の人ではなく、原籍は湖南か安徽であった。鉅元が蘇州で受験した時、蘇州の人々は彼を「冒籍」と攻撃した。彼は県や府の試験に上位で及第し、院試合格も確実と見られていたためよけい激しく攻撃されたのである。幸い、二人の識者が鉅元が孤寒の子弟であり、またひじょうに聡明なのを見込んで蘇州に籍を取らせて進学させてくれた。私は鉅元と同時に進学した。彼は私よりずっと年少で進学した時、14、15歳にすぎなかったが身体は大きくまるで成人のように見えた。

蘇州の正誼書院では毎月題を出して試験していた。その試験は八股文ではなく詞章の学、詩、詞、歌、賦の類で、必ずしもその日の内に答案を出さなくてもよかった。彼は変名で三、四本の答案を書いた、全く企及す可からざることである。私は彼に対して本当に三舎を避けていた。

その後七、八年互いに消息がなかったが、ある日上海の味蕪園（俗に張

6) 包天笑「李伯元」『資料』28頁より引用。原載は「鈞影樓筆記」中の〈晚清小説家〉で、『小説月報』第19期（1942年4月出版）に掲載。

7) 鉅源は包天笑に「(李伯元は)《游戲報》を完全に私に任せてしまい、自分は全く筆を取ろうとしなかった」(同前)と語っているし、《繁華報》を実際に切り回していたのも鉅源らしい。李錫奇の「李伯元生平事蹟大略」には「伯元が招聘した報館の助手歐陽鉅源は、長い間報館にいて内外の情勢を熟知しているのをいいことに報館の独占を計った」とある。(『資料』33頁)

家花園、張園と簡稱す)で鉅元に会った。彼は私に近況を話した李伯元を紹介してくれた。しかし私が当時交際していた人たちは……李伯元は文才はあるが品行がよくないと言い、多くの例をあげて証明した。そこで私も李との交際を望まず必ずしも彼をもち上げなかった。しかし欧陽はその時一知己を得てひじょうに満足していた。

李伯元にとっては最も有力な助手を得たと言える。小説が必要なら小説、詩、詞、歌、賦が必要ならそれらを、そのうえ筆の速さは尋常ではない。伯元の欧陽に対する報酬がいかほどだったのか、その内情を全て知ることはできないが、ただ彼らが酒色の限りを尽くし苦楽を共にしたことはわかる。《繁華報》は彼ら二人の生活の糧であり、7、8年来ずっと欧陽によって支えられてきた。

欧陽鉅元のような早熟で才能豊かな青年があつた汚れた租借地に行かなかつたなら、ここまで墮落することはなかつただろう。もちろん厳しく己を律せず、交友を慎しなかつたのは自ら招いた咎である。(鈞影“補述茂苑惜秋生事”)

鉅元は1907年の暮、零落して上海のある宿屋で没したが、その時まだ25歳になっていなかったというから、⁸⁾ 恐らく24歳だったのだろう。これから逆算すると生年は1883年前後で、秀才選抜試験に応じたのは1897年か98年ということになる。⁹⁾

人並に受験勉強もし、正誼書院に進学もした筈の鉅源がどうして突然上海へ出て来たのかについてはよく分らない。しかし、「寄懷東山後人、録請游戲主人郢政」四首中の第三首に、

得難し 孟嘗の肯えて士を容るるを

8) 包天笑“李伯元”(『資料』27頁)に「死时尚未滿二十五歳」とあり、魏紹昌氏も“茂苑惜秋生其人其事”(『資料』494頁)でそれを踏襲している。

9) 但し、この年代の推定には疑問がある。包天笑が鉅源から李伯元を紹介されたのは天笑が22、3歳の頃なので、1898年の暮頃、鉅源が上海へ出たという推定と一致する。しかし、鉅源が天笑と知り合ったのが本当に14.5歳の時ならそれは1897年か98年であり、「その後七、八年互いに消息がなかつた」という天笑の記憶と矛盾する。鉅源がいかに早熟であつたにせよ、十数歳で李伯元に重用されたというのも早過ぎるように思われる。とすると、死亡年令は24歳ではなく30歳を少し過ぎていた可能性もなきにしも非ずだが断定し難い。

何ぞ須く^{つるぎ たた}鋏を弾いて悲歌を發せんや

慈雲一片 天上より来たり

^{おほ}庇い得たり ^{わが}農家の雁翼の多きを¹⁰⁾

とある。この詩は1899年1月20日の《游戯報》第569号に掲載されたものである。またこの詩の二首目には「頻年 生計を書備に託す」という語句もあり、これらから鉅源が「孤寒」の子弟で兄弟も多く、生活のために筆写のアルバイトをしていたらしいことが想像できる。とすれば、それ以上に勉強を続けられない家庭の事情があつて、職探しに大都市上海へやって来たと考えられなくもない。その時、鉅源は孟嘗君に仕えた馮驩が刀のつかを叩いて不満をもらしたように、自分自身も鋏を弾いて悲歌を發したい心境だったのであろう。「慈雲一片」が何を指しているのかこれまた不明であるが、鉅源の詩はこれの前にもう一篇《游戯報》に載っている。「上游戯主人小詩四章聊博一笑」という詩四章で、「雄弁能く四座の鋒を摧き、書を秘すること十万 ^{つと}早に胸に蟠まれり」¹¹⁾などの句があり、伯元にひじょうな敬意を抱いていたことがうかがえる。

鉅源がこれらの詩を世に問うたのは十数歳、又は二十数歳の頃のことである。包天笑が「早熟で才能豊かな青年」と鉅源を評しているのも肯ける。李伯元はその才能に注目したであろう。まして詩を上られたり郵政を請われたりするのには李伯元にとって不愉快である筈はない。かくして青年鉅源は游戯報館で伯元の助手をつとめることになったと思われる。この「寄懷東山後人」という詩が、もし伯元の招聘後であるなら「慈雲一片」は伯元を指すのであろうが断定し難い。

続いて99年2月21日の《游戯報》第593号に“吳中新年竹枝詞十二首”¹²⁾が発表されている。

現存する作品から見ると、彼の思想傾向は義和団事変を契機として一変するようと思われる。義和団事変に関する著述には1901年に発表された『被難始末記』序文および「題烏目山僧《庚子紀念図》」がある。そして1903年の『維新夢伝奇』『負曝閑談』と続く。この頃から鉅源の執筆姿勢には筆をとること

10) 『資料』526頁。

11) 同前 49頁。

12) 同前 524～526頁。

で現実の変革にかかわろうとする意欲が濃厚になって来たように感じられる。
《庚子紀念図》の題詞の最後、つまり第八首目は、

雲煙を駭遣し 往事を臚陳す
公権を筆諫するは 少陵の詩史なり
山璞海珠 一紙に萃まる
同胞黃種 其れ各おの此を視よ¹³⁾

と締めくくられている。また『負曝閑談』第12回には「もともとその時上海は維新党の巢窟であり、金と能力のある者は新聞を発行し、金がなくて能力のある者は翻訳し、金も能力もない者は維新党の看板を掲げてたぶらかして回った」¹⁴⁾とある。「金と能力のある者は新聞を発行し」に当るのが李伯元、「金がなくて能力がある者は翻訳し」に当るのが鉅源自身（ただし、鉅源に翻訳能力があったかどうかは明らかでないが）、そして「金も能力もない者は維新党の看板を掲げてたぶらかして回った」のだが、そんなニセ維新派に対する諷刺・嘲笑が『閑談』における第13～20回と言えよう。とりわけ第15～19回に登場する日本留学から帰国したばかりの黄子文という人物は悪質である。

黄は維新にかぶれ、他人に論説詩詞を書かせて新民叢報社や新小説社に送り、自分の名儀で発表させて有名になった富豪の親友、田雁門に「今、我が中国の貧弱はこんなにひどく、政治によっても教育や法律によっても改良できません。その理由を一言で言えば開通させる方法がないからです。新しい書物や新聞を読ませる以外に鍵はありません。私は数人の同志を集めて書局を開き、報館も置きたいと思います。書物も新聞も発行するわけです。そうすれば要する費用はたいしたことなくて得る所の利益は小さくありません」ともちかける。田は「黄さん、あなたの考えは素晴らしい。私は国民の公益のためにももちろん賛成します」¹⁵⁾と言って黄子文に四千六百元という大金を預ける。黄は二か月後、『自由原理』という薄っぺらで粗悪な本を一冊出しただけで雲隠れしてしまう。こういうニセ維新派を描写する筆致には若い鉅源の憤りがあふれている。それ

13) 阿英編『庚子事变文学集』第1巻 詩詞 中華書局出版 1959年5月第1版 165頁。

14) 上海文化出版社出版 1957年9月 第1版 55頁。(以下『閑談』と略記)

15) 同前 72頁。

がさらに徹底しているのが『活地獄』第43回と言えるようだ。

北通州地方に王国重という秀才がいた。間違っただけを許さないで人々に嫌われていた。彼はいつも新しい本や新聞を取り寄せ、後には日本で出版された新民叢報、ルソーの民約論、アダム・スミスの原富などを読み、中国の積弱・積貧の原因を理解した。人々にも自由とか平等とか口走るものだから気狂いとか革命党とかと噂されるようになった。

ある年、天津駅で刺客が欽差大臣を暗殺しようとした。刺客が逃げてしまったので厳しい捜索が行われた。王秀才はその時たまたま天津の親戚を訪問しており、暗殺失敗と同時に帰郷したため刺客と間違われて逮捕されたが同窓生が天津県知事に「王は狂生にすぎず普段悪事をはたらいたこともない」と手紙を書ってくれたのでやっと釈放された。

王は帰宅すると弁髪を切り、服装を改めて家中の物を売り尽くし、妻を実家に帰して留学の途につく。出発に際し王は「俺は死ぬなら外国で死ぬ。こんな無茶な世界にこれ以上住みたくない」と言った。

日本へ向かう船上で直隸警察局局长の辛国明に会い、王が自分の冤罪を話すと辛は「中国の暗黒は極点に至った」と嘆息した。

上述のようなストーリーだが、骨を埋めるのも嫌なほど「無茶な世界」と言い、「中国の暗黒は極点に至った」と表現しているのは鉅源の現状認識を示すものとして注意に値する。王秀才の出国の弁に対して鉅源はわざわざ「これは憤激の談ではあるが、しかしまた現状でもある」と註記しているのである。

もっとも鉅源自身は李伯元とともに毎夜花柳の巷に遊び、妓女に詩を贈ったりし、ついに梅毒を患って死ぬのだから何をか言わんやであるが。

しかしまた、夜な夜な酒色に耽ることによって暗黒の現実から逃避し、憂さを晴らしていたとすれば、花柳病のため早逝した鉅源が哀れでなくもない。

欧陽鉅源の著作について

現存している鉅源の著作の発表順序および掲載紙誌は次の如くである。¹⁶⁾

16) 但し同年中に発表されたものについては前後しているものがあるかも知れない。

1. “上游戲主人小詩四章聊博一笑” 1899年1月12日《游戯報》569号
2. “寄懷東山後人，錄請游戯主人郢政” 1899年1月20日《游戯報》569号^(マ)
3. “吳中新年竹枝詞十二首” 1899年2月21日《游戯報》593号
4. “遊留園記” 1899年5月18日《游戯報》679号
5. “小住崧濱，薄游塵肆，輒就所見，譜以短章，拉雜書之，誠不足值方家一笑也” 1899年6月20日《游戯報》712号
6. “玉鉤痕伝奇” 1899年(?)《游戯報》(?)
7. 『被難始末記』序文 1901年天中節後
8. “題烏目山僧《庚子紀念図》” 1901年
9. “輓陸素娟聯” 《飛報》1902年3月15日
10. 『維新夢伝奇』(1～6齣) 1903年5月1日～6月15日『繡像小説』1～6期
11. 『官場現形記』序文 1903年 世界繁華報館本巻首
12. 『負曝閒談』1903年6月15日『繡像小説』6～41期
13. 時調唱歌“破国謡”——悲東三省也(仿鳳陽花鼓調) 1903年8月15日『繡像小説』第10期
14. 『海天鴻雪記』序文 1904年 世界繁華報館本巻首
15. “新上海伝奇”(単齣) 観賽 1904年九秋『二十世紀大舞台』¹⁷⁾ 第1期
16. “拿破崙”(単齣) 嘆島¹⁸⁾ 1904年小陽月『二十世紀大舞台』第2期
17. 『活地獄』第43回 1906年『繡像小説』第72期
18. 『糊塗世界』序文 1906年中秋 世界繁華報館本

現在判明しているのは以上であるが，《游戯報》など掲載紙誌が全て発見されればまだこの他にも出て来るものと考えられる。

次に上述の著作について若干説明を補足しておきたい。

1. “上游戲主人”の《游戯報》登載月日については、『資料』第二輯史料の

17) 中国における最も初期の戯劇雑誌。1904年秋創刊。半月刊。発行は二期のみ。革命の宣伝を目的とした異彩を放つ文芸刊行物であった(阿英著『晚清文芸報刊述略』古典文学出版社出版 1958年3月第1版 20頁)

18) 第2期には汪孝農“縷金箱”・醒獅“金谷香”及び鉅源“拿破崙”の三種の京劇が掲載されている(同前 22頁)

部(49頁)では1899年1月12日になっている。ところが魏紹昌氏の“茂苑惜秋生其人其事”(『資料』492頁)には「1898年の冬、彼は上海へ来てまず《游戯報》に投稿した。この年十二月の《游戯報》には惜秋生が李伯元に献じた小詩四章が発表された」とあり、発表年月日がズレているが、これは旧暦と新暦の違いであろう。

ただしこの“569号”という号数は次の“寄懷東山後人”と重複しており、どちらが正しいのか判定し難い。

3. “吳中新年竹枝詞”の吳中は蘇州を指す。この詞は上海へ出て来た鉅源が故郷の新年の風俗を懐しんで作ったのではあるまいか。これらの詞には各々短い解説がついている。例えば第二首目は、

天街曉日 正に瞳矐たり
健僕前駆して意気雄んなり
賀客 都 みな しづか 嫺に鳳字を題す
一行の名刺 輝くこと猩紅たり

吳の俗 歳を賀するに多くは名柬を以って往来す、即ち門を踏むもまた号簿に署名し、主人に見えずして去る。¹⁹⁾

といった具合である。

4. “遊留園記”はもちろん蘇州の名園——留園を題材にしたものである。鉅源は蘇州に住んでいたので留園に遊ぶ機会も多かったのであろう。最初の37句は叙景、最後の6句には留園に対する愛着がこめられている。

5. “小住松濱”は上海の印象記といった所であろうか。大都市上海の面目躍如たるものがある。

6. “玉鈎痕伝奇”

李伯元に《游戯報》の花榜で〈四大金剛〉と称揚された上海の名妓、林黛玉、陸蘭芬、金小宝、張書玉の四人は、1898年の冬から99年の春にかけて竜華に〈群芳義塚〉を建てるために寄付を募った。李伯元はそのことを宣伝するために鉅源と病紅山人²⁰⁾に合作で“玉鈎痕伝奇”を書かせたのである。現存してい

19) 『資料』524頁。

20) 龐樹伯のこと。芭庵・槩子・竜禅居士などの筆名もある。

るのは10齣中3齣だけで、第2と第5が鉅源、第10齣が病紅山人の手に成っている。

7. 『被難始末記』序文

義和団事変に遭遇した際の艱難辛苦を描いた林黛玉の『被難始末記』に寄せた序文である。この序文は阿英編『庚子事変文学集』第四巻 散文の p. 1065～p. 1067に、本文は p. 1067～ p. 1085に収められている。

阿英はこの『始末記』について「疑うらくは本書の叙文の作者茂苑惜秋生が林の口述によって書くか、或いはその原作を潤飾して出来上ったのではあるまいか」²¹⁾と述べ、魏紹昌氏も「全文もまた惜秋生の代筆かも知れない」²²⁾と書かれている。銭昕伯は「惜秋生と黛玉は巫山の誼み有り、既に黛玉の身を沾し、又黛玉の銭を取り、終には且つ黛玉の名を敗らんと欲す」と鉅源を非難している。²³⁾ 鉅源がいつ頃から黛玉のヒモ的存在になったのか明らかではないが、鉅源は1899年頃すでに“玉鉤痕伝奇”を書いて黛玉らを賞揚しているし、李伯元も黛玉とは親しかったので、彼女がこの『被難始末記』を執筆するに当っては伯元や鉅源の慫慂・援助があったであろうことは当然推測できる。

黛玉は上海を出てからずっと日記をつけていたようで、四月晦日、五月朔夜、初六日、四句鐘、十八日夜二句鐘といった日付けや時刻が記されており、それが史料価値を高めている。さらに詩も能くしたようで、日記の中に書きつけている。次に九成を過ぎた際、魏の文帝の墓を見に行って作った詩を例として挙げておく。

一時万感こもこも交と集まり、筆を援り二絶を書して云く：

関中 吳 蜀 地を三分す

擾乱 蒼生自ら存せず

数十年中 民は水火

大業を私して児孫に与えんと欲す

21) 13) に同じ，“関于庚子事变的文学” 35頁。

22) “惜秋生作品選刊”『資料』510頁。

23) 《申報》三傑の一人と言われた銭昕伯（筆名は霧裏看花客）の『真正老林黛玉』（1919年10月 民国図書館発行）による。ここでは『資料』520頁から引用した。

洛神の態度は自ら驚鴻たり
 奴輩 倉皇として下風を拝す
 我 劉楨に学びて平視を作す
 墓門を来往すれば 忘^{はなはだ} 忽忽たり

題未だ畢らざるに、日は已に將に暮れんとし、騾夫は渡河を促す。²⁴⁾

ここに見られるように黛玉自身かなりの著述能力を持っていること及び『被難始末記』の文体と鉅源の作品との文体に乖離が感じられることなどから、私は鉅源の筆が入っているにせよ、それは朱を入れた程度にすぎず、基本的には黛玉自身の手になるものと考えている。鉅源は序文において「野史の膿流と雖も実に情場の佳話なり」²⁵⁾と賞讃している。艱難辛苦の末、再び上海に舞い戻って来た黛玉から、女性らしい細やかな筆致で書き綴られた日記を見せられた鉅源は、それに手を入れて公刊することを勧めたのではあるまいか。阿英は「この書は辛丑に刊行され、巾箱小冊、今すでに多く見ず」²⁶⁾と解説している。どこの出版社から発行されたのか残念ながら記述されていないが、余り広くは流伝しなかったのであろう。

8. 烏目山僧の《庚子紀念図》は、章鐘亮ら17人の題詞が付されて1901年に刊行された。鉅源の作もその中の一篇である。それらは阿英編『庚子事変文学集』第1巻詩詞の部に収められている。鉅源の題詞は八首あるがその中の第2首目を紹介しよう。

庚子の歳、妖星座を犯す
 竿を削りて刃を作り 營を熱^もやして火と為す
 蟻屯蟻聚するも 其の類甚だ 顛^{つらくれ}のごとし
 天闊^{くら}くして色無く 日惨として墮ちんと欲す²⁷⁾

9. 妓女の陸素娟を悼んだ聯である。²⁸⁾

10. 『維新夢伝奇』

この作品は『繡像小説』に次のように登載されている。

24) 13) に同じ。第4巻 散文 1083頁。

25) 同前 1065頁。

26) 21) に同じ 35～36頁。辛丑は1901年。

27) 13) に同じ 165頁。

28) 17) の『晚清文芸報刊述略』“晚清小報録”81頁に引用されている。

| | | | | |
|--------|----|--------|-----------|----------|
| 第1 齣 | 感憤 | 第1 期 | 1903年5月1日 | |
| 〃 2 〃 | 入夢 | 〃 2 〃 | 5月15日 | |
| 〃 3 〃 | 授職 | 〃 3 〃 | 閏5月1日 | |
| 〃 4 〃 | 写本 | 〃 4 〃 | 〃 5月15日 | |
| 〃 5 〃 | 建路 | 〃 5 〃 | 6月1日 | |
| 〃 6 〃 | 采鋏 | 〃 6 〃 | 6月15日 | 以上“惜秋填詞” |
| 〃 7 〃 | 講式 | 〃 9 〃 | 8月1日 | “鮑士倚声” |
| 〃 8 〃 | 勸学 | 〃 19 〃 | | |
| 〃 9 〃 | 裁官 | 〃 20 〃 | | |
| 〃 10 〃 | 訓農 | 〃 21 〃 | | |
| 〃 11 〃 | 驗廠 | 〃 22 〃 | | |
| 〃 12 〃 | 商戦 | 〃 23 〃 | | |
| 〃 13 〃 | 外交 | 〃 24 〃 | | |
| 〃 14 〃 | 立憲 | 〃 25 〃 | 以上“旅生続著” | |
| 〃 15 〃 | 大同 | 〃 27 〃 | | |
| 〃 16 〃 | 夢醒 | 〃 28 〃 | | |

第15期と16期は目録では“旅生続著”，本文では“遯廬補贖”となっている。

上述のように鉅源自身が筆を取ったのは第1 齣から第6 齣までの六齣分にすぎず、旅生その他の人々によって書き継がれ、完成したものである。²⁹⁾「《維新夢》と《経国美談新戯》の二種は、最も読者の称讃する所であった」³⁰⁾ので、中断するに忍びず鮑士らが続作したのであろう。鉅源が『維新夢伝奇』を第6 齣までで中断した理由として『負曝閑談』の連載を始めたことが考えられる。『閑談』は『維新夢伝奇』の第6 齣と同じく、『繡像小説』第6 号から連載が始まっている。『閑談』から推測して、小説があまり得意だったとは思えない鉅源にとって、『閑談』と『維新夢』二作の同時執筆はかなり負担だったのでは

29) この作品について阿英は『繡像小説』が初めて刊行された時(1903)、惜秋生は『維新夢伝奇』を書いたことがある(何故か中断し、『痴人説夢記』の作者、旅生により続けられ完成した) (“惜秋生非李伯元化名考”阿英著『小説閑談』古典文学出版社 1958年5月第1版 22頁。『資料』486頁～489頁にも収録)と述べているが、実際は本文に記した如くである。

30) 17) の『晚清文芸報刊述略』“晚清文学期刊述略”19頁。

ないだろうか。まして包天笑が言うように鉅源が本当に李伯元の作品の多くを代筆していたとするなら尚のことである。中断したとは言え鉅源の思想傾向を考えるうえでは重要な作品の一つである。

11. 『官場現形記』序文は、1903年の世界繁華報館本に掲載され、以後、各種の版本に殆ど転載されたが、李伯元の自序と誤まられることが多かった。

12. 『負曝閑談』：遼園というペンネームで『繡像小説』に連載されたこの鉅源唯一の小説は彼の代表作となっており、まさにこの一作で鉅源は名を知られたと言ってよい。しかし、遼園という筆名の使用頻度が少ないせいもあってかそれが鉅源であることを知っていた人は少数だったようである。当時は単行本がなく、1933年に北京の徐一士が原文に標点をつけて段を分け、回を逐って評考を加え、改めて上海の《時事新報》の副刊《青光》に発表し、翌年、単行本として出版した。その徐一士も遼園が一体誰なのか知っている人がいたら教えて欲しいと呼びかけている。³¹⁾

『繡像小説』の掲載は以下の如くである。

| 第1回 | 第6期 | 第11回 | 第16期 | 第21回 | 第28期 |
|--------|--------|--------|-----------------------|--------|--------|
| 〃 2 〃 | 〃 7 〃 | 〃 12 〃 | 〃 17 〃 | 〃 22 〃 | 〃 29 〃 |
| 〃 3 〃 | 〃 8 〃 | 〃 13 〃 | 〃 18 〃 ³²⁾ | 〃 23 〃 | 〃 30 〃 |
| 〃 4 〃 | 〃 9 〃 | 〃 14 〃 | 〃 19 〃 | 〃 24 〃 | 〃 31 〃 |
| 〃 5 〃 | 〃 10 〃 | 〃 15 〃 | 〃 20 〃 | 〃 25 〃 | 〃 32 〃 |
| 〃 6 〃 | 〃 12 〃 | 〃 16 〃 | 〃 21 〃 | 〃 26 〃 | 〃 33 〃 |
| 〃 7 〃 | | 〃 17 〃 | 〃 22 〃 | 〃 27 〃 | 〃 34 〃 |
| 〃 8 〃 | 〃 13 〃 | 〃 18 〃 | 〃 23 〃 | 〃 28 〃 | 〃 35 〃 |
| 〃 9 〃 | 〃 14 〃 | 〃 19 〃 | 〃 25 〃 | 〃 29 〃 | 〃 36 〃 |
| 〃 10 〃 | 〃 15 〃 | 〃 20 〃 | 〃 27 〃 | 〃 30 〃 | 〃 41 〃 |

このように第29回まではほぼ毎期（11期、24期、26期のみ欠）執筆しているが、第30回に至って5期分もとんでいる。これは鉅源の息切れを示しているのかも知れない。第30回は、「保和殿に受験に行った江澄波が眼鏡を落として割

31) 徐一士『負曝閑談評考』序 原載は上海四社出版社 1934年2月出版の巻首。今、『資料』507頁より引用。

32) さし絵は『閑談』の筈なのに『数女語』と説明されている。

ってしまい、眼鏡なしで階段を登っていた。みなが階段を登っている最中ドタンという音がしたのでみなびっくりした」という所で終わっている。第31回は恐らく近眼の江澄波が足を踏み外して階段から転げ落ち、騒ぎが持ち上がる、というストーリーの展開になる予定だったのではないかと思われるが、遂に31回以後は書かれずじまいであった。

13. “破国謡”十首中、最初の一首をあげておく。

奉天を説き 奉天を話す
北京唇齒正に相連なるに
一朝 俄人の手に入らば
最も心を傷むるは満城弾雨また硝煙³³⁾

このように砲火にさらされる人々に思いを寄せ、「ある恥知らずの人が大清国をひじょうに辱しめ、甘んじて他人の奴隷になることを願っている」(第2首)など激しい愛国心が吐露されている。

14. 李伯元の『海天鴻雪記』に寄せた序文である。

15. “新上海伝奇”は上海における競馬の行われる日のにぎわいを描いたもの。

16. “拿破崙”はワーテルローの戦いに敗れてセントヘレナ島に幽閉されたナポレオンの独白である。「昔を思えば風雪に会し、竜吟虎嘯したものだったのに、今に至ってはそれも雲散霧消してしまった。みなフランスの気運が良くなかったためである。内紛並びに外侮のため、盗賊が群起した」³⁴⁾と嘆いている。かつては隆盛を誇り、今は自立すら危ぶまれる中国の姿を、ナポレオンが追われたフランスに重ね合わせているのだろう。

17. 『活地獄』の執筆者ならびに掲載誌は以下の如くである。

第1～39回 『繡像小説』第1～69期 南亭亭長著 願雨楼加評
第40～42回 『繡像小説』第70～71期 蕪叟著 願雨楼加評
第43回 『繡像小説』第72期 茂苑惜秋生著 願雨楼加評

33) 原載は『繡像小説』第10期。『資料』529頁にも所収。但し『小説』では第6首目が“羸馬”(勝った馬)であるが、『資料』では“羸馬”(疲れた馬)となっている。全体の意味からは後者の方が良いようだ。

34) 『資料』511頁より引用。

南亭亭長も願雨楼もともに李伯元の筆名である。伯元が歿したため、40～42回を吳趸人が、43回を鉅元が書き継いだ。『繡像小説』が終刊したため『活地獄』も43回で中断してしまった。40回以後も願雨楼加評となっているが、誰かが願雨楼の名をそのまま使って評を書き続けたのだろう。

18. 吳趸人の『糊塗世界』に寄せた序文は『游戲世界』第10期（1922年3月出版）にも転載されているが、執筆者は李伯元と誤記されている。

歐陽鉅源の思想性について

鉅源は中国の現状について「乾坤乱れて夏夷の図版，胡漢の衣冠も区別す可からず。最も憐れむ可し，八千の烏水旌旗冷え，十六の燕雲劍氣寒し，前塵を溯れば人をして鼻酸せしむ」³⁵⁾と述べ、「上は朝たり，則ちいわゆる賢士大夫皆その心を飲食男女の中に専らにし，その志を肥甘輕暖の内に肆まにし，此の二者を舍いて一物も知らず。后乗の芻蕘を載せるが若く，当場の木偶を弄ぶが若し。下は野たり，鹿豕たらざれば即ち豚魚たり。与に興廢を談ずるも猶鐘鼓を考うるに以って爰居を享くるが若し；与に治乱を論ずるも猶仁義を取りて以って禽獸に教うるが若し。其の上を觀るに彼の如し，其の下を觀るに此の如し，之を謂いて老大の国，野蛮の郷と為すは，自ら是れ定評にして実に過論に非ず」³⁶⁾と嘆じている。

官吏に対しても「蓋し官とは土農工商の利有りて土農工商の勞無き者なり。……脂韋滑稽なる者有り，夤緣奔競なる者有り，而して官の流品已に紊亂を極む。……国衰えて官強く，国貧にして官富む。孝弟忠信の旧，官の身に敗れ，礼儀廉恥の遺，官の手に壞る」³⁷⁾と諸惡の根源を官吏の腐敗墮落に求めている。

そして官吏を登用する科挙の制度について「昔，管仲，齊を覇するの後，首めに女閭を創る。蓋し奇材異能既にその羅致に歸すれば則ち陰謀狡智，漸く銷磨に即く。明太祖の八股を以って士を取ると同一の命意なり，而るに人自ら之

35) 『維新夢伝奇』第3齣。

36) 『糊塗世界』序文

37) 『官場現形記』序文

を覚らざる耳³⁸⁾と、科挙制度制定の眞のネライを指摘する。

さらに科挙受験のために現実の用をなさない古典に埋没する現象に対しても「郷校は是れ人を作るの地、国庠は乃ち士を養うの区なり、只これ戸戸蟲魚の故紙を鑽研するに過ぎず、そもそも且つ家家蛇蚓の陳編を稽考するに非ざるなし。古えを学ぶも何ぞ宗に入る可きや、経に通じるも何ぞ能く用を致すや³⁹⁾と批判し「今より後、野蛮思想を除却し、更に文明の氣象を放出すれば、何ぞ九州の鱗介をして冠裳を奉らしめ難からんや⁴⁰⁾と結んでいる。

この『維新夢伝奇』では徐自立という主人公が天上の神、有外山王から巡環都尉を拝命して新しい産業を興すのであるが、その有外山王の徐自立任命の弁は以下の如くである。

世界荒涼として乾坤寥落せり。意、大いに整頓を加え、重ねて与に維持せんと欲するも……尚、明らかなる人材なく、甚だ躊躇せり。聞き得たり、支那の徐自立、全身韜略、満腹経論、故に夢神を遣わし引導して前に来させ以って孤家の使用に備えんとす。(第3齣)

徐自立は「壯歳、沙漠に従征し、馬角烏頭を望窮し、暮年、江州に遷謫⁴¹⁾された人物である。この兵法の書、転じて兵法を表す“韜略”という語句は「干戈、礼楽の窮を済し、韜略、詩書の変に応ず」と第4齣にも出て来る。その後「奈何せん、軍実を修めず、もし戎行を整えざれば河上逍遙し、関中潰乱し、年々羽檄のみにして略、報捷の意無し。日々竜函、ただ和を求むるの策有り」(第4齣)と続いていることから見ても、鉅源が軍備をひじょうに重視していたことが察せられる。

巡環都尉を授かった徐自立は「強を図るの本を立てんと欲すれば必ず致富の原を探る可し」(第4齣)として「第一に工を興し商を勧む、財源一たび濬^{しょうしょう}えば便ち湯湯たり」(第4齣)と、商工業振興の意図を明らかにする。かくして第5齣の“建路”では鉄道建設の状況、第6齣の“采鉱”では「利を闢くの源は材を鉱に取るべし。迎頭の翠嶂を靚、蜀土をして開山せしめんと欲す」と、

38) 『海天鴻雪記』序文

39) 『維新夢伝奇』第4齣

40) 同前

41) 同前 第1齣

鉱山発掘の意気込みが描かれる。

これを要するに『維新夢伝奇』の意図する所は一言で言えば“富国強兵”であったと思われる。この中の主人公の名前が“徐自立”であるというのも仲々に意味深長である。即ち軍備の増強や鉄道敷設、鉱山発掘などを通じて半殖民地化しつつある中国を徐々に自立させたいという鉅源の願望の表現に他ならないと言えよう。

最後に『負曝閑談』について少し触れておきたい。前述のように富国強兵策を進めて中国の自立を果たしたいというのが鉅源の願望であったが、そのリーダーシップをになうべき官僚たちは「天子を輔くるには則ち足りず、百姓を庄するには余りある」(『官場現形記』序)無能力のくせに民衆に対しては横暴極まりない輩であった。その憤懣が彼に『閑談』の筆を取らせたのではなかったか?阿英に「この書の最大の欠点は形容が過度に誇張され、事実の真实性を喪失するに至ったことである。李伯元の諸書にも同様の欠点があるのは免れないが、しかしこれほど激しくはない」⁴²⁾と批判されるのも、鉅源が若い青年であることを考えれば無理もないようにも思われる。だが1934年に『負曝閑談評考』を出版した徐一士は、

当時、私と凌霄(徐一士の兄……筆者註)が『繡像小説』に掲載される各種の小説の中で最も興味を覚えたのは『負曝閑談』で、その次が『老残遊記』、『文明小史』等の如きはさらにその次であった。⁴³⁾

と回想し、李伯元と比較して「作風についてみれば似ている所もあるが、技術的には『閑談』は『小史』や『現形記』に比べてすぐれている所も少なくない」(同前)「描写に巧みで筆墨は極めて超脱、極めて靈活、面白味は最も濃厚である。諷刺あるいは譴責の意味を以って社会の罪惡なり醜態なりを浮き彫りにしたり描写したりしている他、写景状物みな特長があり、生趣盎然、情韻不匱、人々の興味を唆りたてる力量はまったく称讚に値いする」(同前)と口を極めて賞め讃えている。

42) 阿英著『晚清小説史』第3章 晚清社会概観(下)香港太平書局出版 1966年1月 31頁『資料』499~502頁にも引用。

43) 31)に同じ 506頁。

阿英も李伯元が及ばなかった長所として「文章が爽健靈活なこと」⁴⁴⁾を挙げ、李伯元に及ばなかった短所として「氣力が小さく、大体において力のこもった描写がなされていないこと」(同前)を挙げている。

しかし私はこの“爽健靈活”という批評はむしろ伝奇や序文、詩など小説以外のジャンルの方によりふさわしいように思う。『閒談』に取り上げられている様々な題材自体は悪くないのだが、それを小説化する際の技巧という点では、やや力量不足の感を免れない。素材を素材のまま投げ出した感が強く、描写にふくらみがないため折角の素材が生かされていない。

新しい人物を登場させるにしても、その人物にかかわるエピソードなどを語った後、姓名、号、出身地、経歴などを説明することがきわめて多い。ワンパターンなのである。登場人物の紹介一つにしてももっと多様性があったのではないか。

構成自体にももう一工夫欲しい所である。例えば前述した田雁門は第三夫人の病が重いので第16回ですでに帰郷し、第19回で黄子文から『自由原理』という本が送られて来てそれを自宅で受け取る。ところが第20回では逆戻りして田雁門が帰郷する途中の事件を述べるという具合である。すでに帰宅して落ち着いている筈の田が再び帰途の船中の人となったのでは読者は混乱するだけである。船中の事件は、時間の経過通りもっと前に出すか、或いはむしろ省略して帰宅後の描写に力を入れるかした方がよかったように思われる。鉅源は構成力とか想像力という作家にとって必須の資質に余り恵まれていなかったのではないかという印象を受けた。

だが、『遊戯報』などの資料が全て出そろって、もっと多数の作品を読むことが出来たらまた違った印象を受けるかも知れない。鉅源は早逝し過ぎた。生前の作品は習作である。もっと長命でさらに書き続けていたら『閒談』を超える作品が生まれた可能性もある。しかしながらいづれにせよ阿英が言うように『閒談』が「読むにたえる本」⁴⁵⁾であることは間違いない。その他の作品も清末の水準から見て決して劣ってはいない。

44) 42)に同じ 33頁。『資料』502頁。

45) 同前

にもかかわらず阿英が「惜秋生非李伯元化名考」を書いて誤解を訂正せざるを得なかったほど、鉅源は李伯元の陰に隠れ、片腕になりきっていた。李伯元の代筆者としてはあまり表舞台に出ない方が李伯元にとって好都合だったと考えるのはうがちすぎだろうか。

しかしそれでも李伯元の生前は鉅源は満足していたかも知れない。《游戯報》の編集を任せられ、代筆まで依頼されるほど信頼され、重用されたわけだから。だが、伯元の死後は伯元の遺族に繁華報館から追い出されそうになったり『繡像小説』が停刊したり苦勞も多かったのではなかろうか。1906年に病死した伯元の後を追うように鉅源も翌年歿している。李伯元と歐陽鉅源——清末上海の文芸界が結びつけた陰陽一對の文学者・編集者であった。

(むぎお とみえ)